

働き方改革時代に考えたこと



秋山恵里

花王(株)スキンケア研究所
[131-8501] 東京都墨田区文花2-1-3
主任研究員, 博士(理学).
専門は両親媒性高分子物性, コロイド界面化学.
aikyama.eri@kao.com
www.kao.com/jp/

1996年より花王(株)に入社し、入社以降19年間ゲルエマルション製剤のベースメイク製品開発研究を主要業務として会合性両親媒高分子の物性研究に携わってまいりました。現在は全身洗浄料の製品開発研究をしております。プライベートではやや手のかかる小学生の息子と、新幹線通勤をする同業の夫と家事育児を分担しながら暮らしています。

2014年より高分子学会の男女共同参画委員をさせていただくようになり、研究員の方々とワーク・ライフバランスやダイバーシティについて話す機会が増えました。そこでは「クラスや職場などの所属部門で女性は〇%しかいない」「妊娠、出産、育児と仕事の両立を極限状態で乗り切る」のコメントが定番になっており、厳しさに立ち向かい道を切り開いて行った方々の努力を改めて認識します。

今後を考えたとき、研究分野の女子学生数については男女の隔てなく個人の興味関心により自由に志望分野を決める流れと公平な教育制度がありさほど悲観的ではありません。一方、社会に出た後の働き方については、このままぎりぎりの乗り切り方を続けることに賛成できません。2015年頃より世間で「働き方改革」が議論されるようになりました。今回、経済面や労働形態の観点からではなく、自分自身の民間企業研究員としての経験から、問題点や改善方法について考えてみました。

現所属先は1時間単位での休暇取得制度があるなど育児介護支援制度は進んでおります。しかし整った制度があっても、生活面をおもに引き受けた研究員はほかの方々の7割以下の就業時間とそれ以外を家事労働に費やす日々の中でつらさを抱えている場合があります。日本特有の仕事至上主義が原因の一つかと思えます。自分にも相手にも厳しく常に全力で振る舞うことが正しく、さらに高みを目指す思想によって高い技術力が達成されたのはある程度理解できます。しかしそれを唯一の理想とすると、仕事の時間が生きていくうえで必要な家事労働によって削られた段階で理想像からの乖離を余儀なくされます。共働きの子育て中に男性が理想を継続して女性が一時脱離するケースが比較的多く、その場合の女性は働き手としての理想像に近

づけるため家事労働のほかに夜間休日に家で仕事をするなど疲弊しています。

人それぞれ全力投球する局面があるのは普通ですが、社会人人生すべての期間を全力で仕事に費やし有能な働き手であり続けることが正しいとする考えには疑問があります。男女のどちらもが家事労働と仕事の両方を無理なくやることも理想の一つにはできないでしょうか。仕事に対して不必要に過剰になりすぎず、家事労働も大切だという意識を共有して誇りをもって取り組むことで、制度だけに頼らない自己実現が叶うのではないかと考えています。私事や家庭生活に能力的な意義が見いだせない方もまだ多くいるかもしれませんが、経験上、家事労働と仕事を配分しながら成り立たせるのは集中力と処理力、計画管理が必要です。近頃、猛烈仕事人間の功績は仕事面で優れたものであっても家事労働を除いての成果であることに周囲は気づいているし、スポーツのヒーローインタビューで「支えがあったこそ」とのコメントを多く耳にするようになったことから、表に見えない功績が讃えられています。つらさを抱えることなく、多くの方々が仕事と家事労働を前向きに取り組める時代が来ることを望んでいます。

とはいえ組織側にとって個々の自己実現はさほど重要ではなく、いかに仕事の成果を上げるかに関心があり、その点では私自身を含め社歴の長い研究員の意識改革が必要だと感じています。本質的に必要のないところに時間と労力を過剰に求めていないか、急な人手不足にも対応できるような仕事量の割り振りになっているか、限界までやったかどうかのみを仕事の良し悪しの判断基準にしていないか等、改めて精査したいです。また、自身の子育てを経て子供は親の育て方のみで性質や能力が決まるわけではなく予想もしなかった特性や考え方をもっていることを知り、若い研究員を古い考えで縛らず可能性を活かすべきと思うようになりました。従来の競い合い・全力疾走による成果のみを求めるのではなく、広い視点で新しい提案を受け入れ、そこからの成果を積極的に期待する組織を意識したいです。

それぞれの仕事や生活環境は異なり、空論かもしれませんが、最近の考えを記しました。